

巻頭言

IT文化のコンフリクト

宇都宮大学総合メディア基盤センター長
片桐 雅義 †

もう IT なしには動かない世の中になった。確かに便利で、膨大な仕事がすばやくできるようになった。マスメディアも IT の時代に入って来た。こうなると、IT 社会というよりは、IT 文化という方が適切かもしれない。つまり、社会の構造や制度の問題ではなく、IT が人間の行動のしかた、考え方、生き方を規定するものになっている。

しかし、その変化の速度があまりにも速いので、人びとはそれに追いついていけないように思われる。いわば異文化との遭遇である。これまでの考え方、行動のしかたを捨て去り、切り替えることがなかなかできない。文書の作り方にしてもそうである。ずっと使い続けて来た、紙と手書きの文化の書類をベースにして、そこに IT を導入しようとする。国のレベルでもそれが行われている。科研費の書類づくりに苦労した人は多いだろう。ほとんどすべての研究者が PC を使って書類を作るのに、なぜ手書き時代の様式を死守しなければならないのだろうか。確定申告のオンライン入力は随分よくなった。しかし、書類の様式は前のままである。入力したものが、そこにはめ込まれて行くのだが、なぜ様式は前のままなのだろう。手書きのときにはわかりやすい様式かという、決してそんなことはない。慣れていない人間には非常にわかりにくい、お役所的様式なのである。それでも、国の機関への電子申請が全体の 20%を超えたというニュースが流れているから、電子政府の構想は着々と進行しているのであろう。そこでは新旧の文化を“融合”させようとして、相当な経費と作業がつき込まれているであろう。

情報セキュリティへの脅威は、紙の時代に比べて飛躍的に増大している。しかし、その対策は中途半端であるように感じられる。「みんな気をつけて」というだけでなく、相当の費用と人的資源を投入しなければならない。意識の問題も大切ではあるが、人が自然に行動することがセキュリティの確保につながるようなシステムが必要である。

IT によって、たしかに便利になった。一方、その便利さを支えるためのものすごい仕事をしている人たちがいる。便利さを享受している人びとは、コンピュータを使っているのだから何でも出来るはずだ、もっと便利にならないのか、とってしまう。便利になった、といっても多くの場合、実はローカルな便利さに過ぎない。特に、大学の中では、それぞれの部署でコンピュータにデータを蓄積している。しかし、大学全体のシステムになっていないから、いざというときには、あちこちのデータを集めてつきあわせなければならない。大学内のデータを一元化しようとする、もちろん膨大な費用が必要になるが、毎年 1%の運営費交付金削減のもとでは、なかなか予算がつかない。するとこの業務を担当する教職員にしわ寄せがくるという、極めて望ましくない状況が生まれている。

こんな愚痴を言っても、これらのコンフリクトが解消されるわけではない。特に大学の経営陣には、現状の問題を認識し、一時しのぎではなく将来を見通した投資を決断してもらうことが必要であり、我々にはそのための努力が必要である。

今号の学術情報処理研究には、情報処理教育、セキュリティ、データベース、ネットワーク等の分野の原著論文と発表が収録されている。これらの研究が、IT 文化のコンフリクトを少しでも解消し、IT 文化を支える人にも、それを享受する人にも、幸せをもたらすことに貢献することを願っている。

† 321-8585 宇都宮市陽東 7-1-2 katagiri@cc.utsunomiya-u.ac.jp